

「暗黙の」知能観と社会的望ましさの関連

——他の特性との関連も交えて——

藤 井 勉

[キーワード：①暗黙の知能観 ②社会的望ましさ ③自己報告]

1. 問題と目的

我々は日常生活や学業場面において、様々な困難や失敗に直面する。例えば、学業場面における困難や失敗に対処する能力には、個人によって相違がある。特に「知能」あるいは「知性」に対する捉え方には個人差があり、同じ課題に取り組むとき、同程度の能力を持った2名でも、知能は自身の努力によって成長させ得ると考える者や、自身で制御するのは困難と捉える者がいる（上淵，2003）。

この知能に対する考え方の違いは、課題の遂行に失敗したり、困難を感じたりした際の認知や感情、そして行動パターンの相違をもたらす。換言すれば、知能に対する考え方は、失敗や困難を経験した後の、課題に対する動機づけの違いをもたらすといえる（上淵，2004）。この知能に対する考え方は、「暗黙の知能観（implicit theories of intelligence; Dweck, 1999）」と呼ばれ、知能とは何かという問いに対する個人の解答をさす（上淵，2003）。個人が採用する暗黙の知能観の相違が、達成場面で生起する感情

や行動のパターンを左右する（上淵・川瀬，1995；上淵，2003）。

暗黙の知能観は、増大的知能観と実体的知能観の2種類に大別される。増大的知能観とは、知能は柔軟なものであり、自身の努力によって成長させることが可能という考えである。増大的知能観を持つ者にとって、困難の知覚や失敗の経験は、問題に対して以前とは異なる方法での対処が必要である、という情報として機能する。その結果、異なる方略を用いた解決が動機づけられ、ネガティブな感情は生じにくい。また、失敗の原因を自身の努力不足に帰属する傾向がある。一方、実体的知能観は、知能の量は固定的であり、自身での制御は困難とする考えである。実体的知能観を持つ者にとって、困難の知覚や失敗の経験は、自身の持つ能力が低いということを周囲に露呈した、というネガティブな情報として機能し、ネガティブな感情が生じやすい。また、失敗の原因を自身の能力不足に帰属する傾向があり、後続の課題への動機づけが低下し、回避的になる（Dweck & Leggett, 1988）。

Dweck & Master (2008) は、実体的知能観は、学習を進める上で不適応的だとし、学習スキルと共に増大的知能観を教える指導方法を奨励すると同時に、増大的知能観は、学習者が自らの学びに積極的に関わる、自己制御学習に重要としている。また、Dweck (2006) は、種々の特性は努力しただいで成長させることができると考える増大理論を持つ者は、抑うつ傾向も低く、適応的であるとする“mindset (心のあり方)”理論を展開する。例えば、Dweck & Molden (2005) は、知能観が増大的であるほど、困難を経験しても熟達志向的な反応（e.g., 勉強が難しいとき、私は一生懸命に取り組む）をし、自尊心が低下しないとする。

ところで、心理学における代表的な測定法のひとつに、質問紙法に代表される自己報告がある。この方法は、複数の変数を同時に扱うことができ、実施方法も容易である。また、一度の調査で多くのデータを集めることが

可能であるため、広く普及した。心理学において、自己報告を用いた調査は欠かすことのできないものであり、心理学の発展に大きく寄与したことは、もはや自明である。前述の「暗黙の知能観」も同様に、“私は一定の知能を持って生まれてきており、それを変えることは実際にはできない”などの質問に対する回答を求めるといった、自己報告式の尺度が用いられてきた（e.g., Hong, Chiu, Dweck, Lin, & Wan, 1999; 及川, 2005）

しかし、同時に、その手法に対する問題点も指摘されてきた。たとえば Edwards（1957）は、自己報告による回答は、社会的に望ましい方向に歪められる可能性があることを指摘している。特にステレオタイプやシャイネス、自尊心など、素直に表出することが必ずしも社会的によい結果をもたらさない自己概念において、この傾向は顕著である。たとえば、藤井・杉森・相川（2008, 2009）や Fujii, Tanaka, Noguchi, & Aikawa（2010）では、自己報告によるシャイネスと社会的望ましさとの間に相関がみられることを指摘しているし、谷（2008）や藤井・上淵（2010）は、自己報告による自尊心と社会的望ましさ（self deception: 自己欺瞞）との間に相関を検出している。このように、自己報告式の尺度には、社会的望ましさの影響がみられる可能性が示されている。このことは、質問紙調査法によって現在まで重ねられてきた知見が、社会的望ましさの影響によって歪められている可能性があることを示唆する。

また、藤井・上淵（印刷中）では、IAT を用いて「暗黙の知能観」を潜在的に測定すると同時に、従来の質問紙法による自己報告を用いて、前述の「暗黙の知能観」を顕在的に測定した。その結果、質問紙で測定した顕在的な「暗黙の知能観」と課題遂行との間に関連はみられなかった。同時に、顕在的な「暗黙の知能観」を測定する尺度と社会的望ましさを測定する尺度（北村・鈴木, 1986）との間に正の相関を検出した¹⁾。すなわち、独立変数である顕在的な「暗黙の知能観」尺度への回答が社会的望ましさ

の影響を受けて歪み、従属変数となった課題遂行と関連がみられなかった可能性がある。

また、近年は社会的望ましさを2種類に分類するという主張がある(e.g., Paulhus & Reid, 1991; 谷, 2008)。ここでは、社会的望ましさ尺度は「自己欺瞞 (self-deception)」と「印象操作 (impression management)」の2因子から成ると主張されており、それぞれが相関する対象も異なることが示されている。自己欺瞞とは、回答者が本当に自分の自己像と信じて無意識的に社会的に望ましく回答する反応であり、印象操作とは、故意に回答を良い方向に歪めて、真の自己像を偽る反応を意味する(谷, 2008)。暗黙の知能観は、自己欺瞞あるいは印象操作のどちらの尺度と、あるいは両方の尺度と相関するのだろうか。

本研究では、暗黙の知能観を測定するとされる尺度(e.g., Dweck, 1999; 及川, 2005)と、社会的望ましさ尺度を構成する2つの下位尺度との関連を検討することを目的とする。また、自尊心や特性不安を測定する尺度を併せて実施し、Dweck (2006)の主張する“mindset”の理論に沿った結果が得られるかを検討する。

2. 方法

2.1 参加者

東京都内の大学に通う大学生および大学院生 91 名 (男性 17 名、女性 57 名、性別未記入 17 名、年齢の $M = 20.57$ 、 $SD = 2.13$) であった。

2.2 材料

以下、すべての尺度は7件法(1:全くあてはまらない-7:非常にあてはまる)を用いた。

知能観尺度 Dweck (1999) による、個人の暗黙の知能観を測定するとさ

れる尺度である。及川（2005）では、intelligence を「才能」と翻訳して使用しているが、Dweck & Master（2008）によれば、運動や学業など、個人の持ちうる暗黙の理論は領域に応じて異なることが指摘されている。すなわち、才能という表現を用いた場合、各人の想定する暗黙の理論は、必ずしも学業的な「知能観」を参照していない可能性がある（同様の議論は藤井・上淵，印刷中）。ゆえに、本研究では藤井・上淵（印刷中）と同様、intelligence は「知能」と翻訳した。3項目から成る。この尺度の得点が高いほど実体的知能観傾向と査定されるが、解釈を容易にするために、この尺度の得点が高いほど増大的知能観傾向となるよう得点化する。

社会的望ましさ反応尺度 谷（2008）によって翻訳された、Paulhus & Reid（1991）が作成した尺度であり、「自己欺瞞」と「印象操作」の2因子から社会的望ましさを測定する尺度である。各12項目、計24項目から成る。得点が高いほど、その傾向が強いことを示す。

自尊心尺度 Rosenberg（1965）によって作成された尺度を、山本・松井・山成（1982）が翻訳したものを使用した。10項目から成る。得点が高いほど、自尊心が高いことを示す。

特性不安尺度 清水・今栄（1981）による、個人の特性としての不安を測定する尺度である。20項目から成る。得点が高いほど、特性としての不安が高いことを示す。

2.3 手続き

参加者の大半には、講義の時間を利用して質問紙を配布した。また、その他の参加者には、直接質問紙を手渡し、回答を依頼した。どちらの場合も、回答は統計的に処理され、個人が特定されることはないこと、回答は義務ではないこと、分析終了後に質問紙を安全な方法で廃棄することを説明した。参加者が回答を終了した後、質問紙を回収し、薄謝を手渡して調

表 1 各尺度の相関係数および記述統計量 (N = 91)

	1	2	3	4	5	M	SD	α
1 知能観尺度	1	.33**	.28**	-.45***	.45***	4.20	1.23	.87
2 自己欺瞞尺度		1	.17	-.51***	.59***	3.54	.69	.74
3 印象操作尺度			1	-.18 [†]	.11	3.74	.66	.64
4 特性不安尺度				1	-.62***	4.06	.87	.89
5 自尊心尺度					1	4.09	.87	.86

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

査を終了した。

2.4 作業仮説

先行研究より、以下の作業仮説を立てた。

- (1) 知能観尺度と社会的望ましき尺度は、符号は不明確であるが、一定の相関を示すだろう。
- (2) Dweck (2006) の主張から、知能観尺度は、特性不安尺度とは負の相関を示し、自尊心尺度とは正の相関を示すだろう。

3. 結果

各尺度について、逆転項目は逆転し、合算平均得点を求めた。その上で、各尺度の関連を検討するために、相関分析を行った。結果および記述統計量は表 1 に示す通りである。また、各尺度の信頼性係数の推定値として α 係数も併せて記載した。各尺度の α 係数は .64 から .89 の値が得られ、おおむね満足できる値と判断した。

知能観尺度は、社会的望ましき反応尺度の下位尺度である自己欺瞞・印象操作の両尺度と正の相関がみられ、特性不安尺度とは負の相関、自尊心尺度とは正の相関がみられた。

4. 考察

知能観尺度と社会的望ましさ尺度との間に、有意な相関が検出された。知能観尺度と自己欺瞞尺度には正の相関がみられたことから、本来の自己像と信じて無意識的に社会的に望ましいように反応するほど、増大的知能観を有していると報告する可能性が示された。

また、知能観尺度と印象操作尺度との相関係数の符号も正であったことから、自身の印象を故意によく見せようとして回答を歪めるほど、増大的知能観を有していると報告する可能性が示された。知能観尺度は、社会的望ましさ尺度の2尺度とともに相関がみられたことになる。これらのことから、仮説1は支持された。

また、知能観尺度と特性不安尺度との間には負の相関がみられ、増大的知能観を有しているほど特性不安が低いことが示された。加えて、知能観尺度と自尊心尺度の間には正の相関が得られた。増大的知能観を有しているほど特性不安が低く、自尊心が高いという結果は、種々の概念は努力によって増やすことが可能と考える増大理論を持つ者は適応的であるとする Dweck (2006) の“mindset”の考え方と整合する。ゆえに、仮説2も支持された。

自尊心尺度は、自己欺瞞との間には正の相関が得られた一方で、印象操作とは無相関であったことは、谷 (2008) や藤井・上淵 (2010) と一致する結果である。特性不安尺度は、自己欺瞞尺度と有意な負の相関をしており、本来の自己像と信じて無意識的に社会的に望ましいように反応するほど、特性不安は低く報告されることが示された。

本研究の結果から明らかになったのは、暗黙の知能観を測定する尺度には、自己欺瞞や印象操作など、回答を歪める可能性のある要因との相関がみられたことである。藤井・山口・上淵 (2008) や藤井・上淵 (印刷中)

は、「暗黙の (implicit)」という定義に着目し、潜在的測度である Implicit Association Test (IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を用いて実験参加者の暗黙の知能観を測定した。これらの研究では一貫して、IAT を用いて測定された暗黙の知能観と社会的望ましさ尺度との間には相関がみられなかった。

しかし、これらのことから、暗黙の知能観は潜在的測度を用いて測定すべきであるという議論を行うのは不毛であろう。藤井・上淵 (印刷中) は、人間の情報処理には意識を伴わない自動的過程と、意識を伴う統制的過程の2過程があるとする Posner & Snyder (1975) の2過程モデルを適用して前述の現象を解釈し、潜在的測度は自動的過程を反映した指標と関連し、顕在的測度は統制的処理を反映した指標と関連するということを実証した (同様の結果は Asendorpf et al. (2002) や藤井他 (2009) でも示されている)。すなわち、潜在的測度のみによって予測される指標があるだけでなく、質問紙などの自己報告、すなわち顕在的測度によってのみ予測される指標も存在する。ゆえに、個人のパーソナリティを多面的に理解しようとした際、潜在的測定法と顕在的測定法を併せて使用した方が、より深い理解が得られる可能性がある (同様の議論は藤井他, 2009)。

ただし、参加者全員に対し、質問紙調査に併せて、主に実験場面で使用されることが多い IAT を実施するのは困難である。暗黙の知能観や自尊心を測定する IAT は紙筆版も作成されており (藤井, 2009; 藤井・上淵, 2010)、顕在的測度 (質問紙) と潜在的測度 (IAT) を併せて実施することは可能であるが、参加者の負担や時間を考慮する必要がある場合、社会的望ましさ尺度を含めて質問紙の尺度構成を行い、関連を検討したい変数との間の偏相関をとるという方法が無難であろう。

今回は、暗黙の知能観を測定するとされる尺度と社会的望ましさ尺度との関連に焦点を当てたが、自尊心尺度や特性不安尺度にも、社会的望まし

さ尺度との相関がみられた。上記の議論は、これらの概念に関しても無関係ではない。今後、自尊心や不安を顕在的に測定する他に、IATを用いて潜在的な自尊心や不安を測定し、顕在的・潜在的測度の関連および社会的望ましさ尺度との関連について精査することも興味深いと考える。

5. 結論

本研究の目的は、「暗黙の」知能観を測定するとされる知能観尺度と、社会的望ましさ尺度との関連を検討することであった。調査と分析の結果、暗黙の知能観を測定する自己報告式の尺度と、社会的望ましさ尺度の2因子には相関がみられたことから、知能観尺度には、社会的望ましさのバイアスによって回答が歪められている可能性が示された。

付記

本研究の一部は、The 27th International Congress of Applied Psychology において発表されたものである。質問紙調査に協力を賜った皆様と、本論文を査読いただきました伊藤忠弘准教授（学習院大学）に心から感謝申し上げます。

注

- 1) ただし、ここで用いられた社会的望ましさ尺度は、参加者の負担を軽減するために、33項目で構成される尺度から19項目を選出したものである。

引用文献

- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double Dissociation Between Implicit and Explicit Personality Self-Concept: The Case of Shy Behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 380-393.
- Dweck, C. S. (1999). *Self Theories: Their role in motivation, personality and development*. Philadelphia: Psychology Press.

- Dweck, C. S. (2006). *Mindset: The New Psychology of Success*. New York: NY, US, Random House Inc.
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, 95, 256–273.
- Dweck, C. S., & Master, A. (2008). Self-theories motivate self-regulated learning: Theory, research, and applications. In D. H. Schunk & B. J. Zimmerman (Eds.), *Motivation and self-regulated learning*. New York: Lawrence Erlbaum Associates, pp. 31–51.
- Dweck, C. S., & Molden, D. C., (2005). Self-Theories: Their Impact on Competence Motivation and Acquisition. In A. J. Elliot & C. S. Dweck (Eds.), *Handbook of Competence and Motivation*. New York: Guilford Press, pp.122–139.
- Edwards, A. L. (1957). *The social desirability variable in personality assessment and research*. New York: Dryden.
- 藤井勉 (2009). 「知能観 IAT 紙筆版作成の試み」『学習院大学人文科学論集』18、305–319 頁.
- 藤井勉・杉森伸吉・相川充 (2008). 「IAT を用いたシャイネス査定の試み」『日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集』92 頁.
- 藤井勉・杉森伸吉・相川充 (2009). 「IAT を用いたシャイネス査定の試み (2)」『日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループダイナミックス学会 56 回大会合同大会発表論文集』594–595 頁.
- Fujii, T., Tanaka, C., Noguchi, Y., & Aikawa, A. (2010). An attempt to measure implicit and explicit shyness. Poster presented at the 27th International Congress of Applied Psychology, Melbourne, Australia.
- 藤井勉・上淵寿 (2010). 「紙筆版 IAT を用いた自尊心査定の試み」『東京学芸大学紀要総合教育科学系 I』61、113–120 頁.
- 藤井勉・上淵寿 (印刷中). 「潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討」『教育心理学研究』58.
- 藤井勉・山口有紀・上淵寿 (2008). 「暗黙の知能観の査定における IAT の有用性の検討」『日本心理学会第 72 回大会発表論文集』1078 頁.
- Greenwald, A.G, McGhee, D. E, & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring Individual Differences in Implicit Cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464–1480.
- Hong, Y., Chiu, C., Dweck, C. S., Lin, D. M., & Wan, W. (1999). Implicit Theories, attributions, and coping: A meaning system approach. *Journal of Personality and So-*

- cial Psychology*, 77, 588–599.
- 北村俊則・鈴木忠治（1986）。「日本語版 Social Desirability Scale について」『社会精神医学』9、173–180 頁。
- 及川昌典（2005）。「知能観が非意識的な目標追求に及ぼす影響」『教育心理学研究』53、14–25 頁。
- Paulhus, D. L., & Reid, D. B. (1991). Enhancement and denial in socially desirable responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 307–317.
- Posner, M. I., & Snyder, C. R. R. (1975). Attention and cognitive control. In R. L. Solso (Ed.), *Information processing and cognition: The Loyola symposium*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, pp. 55–85.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 清水秀美・今栄国晴（1981）。「State-trait- anxiety- inventory の日本語版（大学生用）の作成」『教育心理学研究』29、348–353 頁。
- 谷伊織（2008）。「バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（BIDR-J）の作成と信頼性・妥当性の検討」『パーソナリティ研究』17、18–28 頁。
- 上淵寿（2003）。「達成目標理論の展望—その初期理論の実際と理論的系譜—」『心理学評論』43、392–401 頁。
- 上淵寿（2004）。「達成目標理論」上淵寿（編）『動機づけ研究の最前線』北大路書房、88–107 頁。
- 上淵寿・川瀬良美（1995）。「目標理論」宮本美沙子・奈須正裕（編）『達成動機の理論と展開：続・達成動機の心理学』金子書房、187–215 頁。
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）。「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30、64–68 頁。

Relationships between “implicit” theories of intelligence and social desirability

FUJII, Tsutomu

The purpose of this research was testing correlations between “implicit” theories of intelligence scale and social desirability scales. Participants, 91 university students, joined this study (questionnaire survey). Results showed that correlations between “implicit” theories of intelligence scale and social desirability scales (self deception and impression management) were positive and significant. It was revealed that the response of traditional self-report scale (implicit theories of intelligence) was affected by social desirability biases.

(人文科学研究科心理学専攻 平成 21 年度博士後期課程 1 年中途退学
現：文学部心理学科助教)